

新年「資本論を読む会」(第16回)

日時：2020年1月14日(火)午後6時～

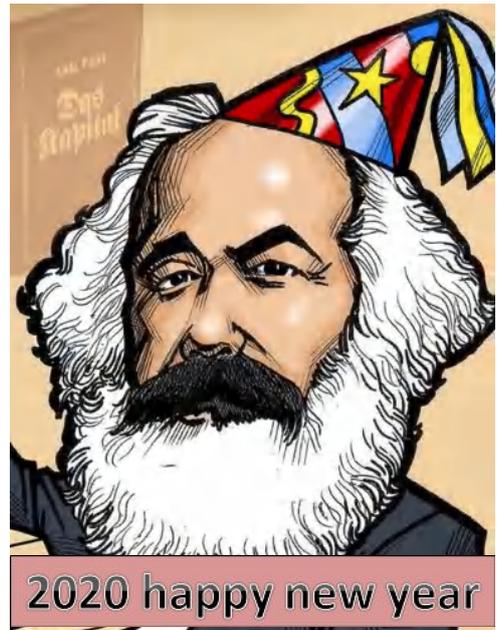
会場：支局・社青同事務所

12月10日に開いた「読む会」は、ついに「第2篇 第4章 貨幣の資本への転化」に入りました。今回は「第1節 資本の一般定式」(p255-271)。レポーターはTakちゃん。参加者は7人で、いつも通りに読み合わせしてから討論しました。終了後、忘年会を兼ねた飲み会でも議論は続きました。次回は「第2節 一般定式の矛盾」です。

初めての方大歓迎。『資本論第一分冊』(国民文庫)は、社青同にも在庫があります。

また、これまでの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.cocacn.jp/>「資本論を読む会」コーナーにあります。



レポーターから

第四章「貨幣の資本への転化」 第1節「資本の一般定式」

○「商品生産」と「発達した商品流通である商業」は、資本成立の歴史的前提である。商品流通が最後に産む「貨幣」が「資本の最初の現象形態」である。

○「貨幣としての貨幣」(単純な商品流通)と「資本としての貨幣」(資本の流通)は、まず流通形態で区別され、前者は、 $W-G-W$ ：買うための売りであり、資本は $G-W-G$ ：売るための買い、である。この「形態・現象」を分析することで、その背後にある「内容・本質」が明らかになる。

○共通点は、「売り」と「買い」に分かれ、「商品」と「貨幣」が相対していること。また、「三人の契約者」(売るだけの者・買うだけの者・売りも買いもする者)で成立していること、である。

○異なる点は、「売り」と「買い」の順序が逆、「資本としての貨幣」は、「買い」で始まり「売り」で終わること。始点と終点は「貨幣」であり、それを「商品」が媒介していること、である。

○「単純な商品流通」では、商品は流通から出て消費され、「消費・欲望充足・使用価値が最終目的」であるが、「資本流通」の推進的動機と規定的目的は、「交換価値」そのものである。

○「単純な商品流通」の両極は商品という「同一の経済形態」であり、同一価値量であるが、「違った使用価値の交換」が運動の内容となっている。しかし、「資本の流通」の両極は、貨幣という「同質のもの」なので、交換の結果「同じ量」なら意味がない。この過程は、 $G-W-G'$ 、 $G'=G+\Delta G$ でなければ意味がなく、この増加分 ΔG を、「剰余価値」と名付ける。前貸し価値は自己保存しながら剰余価値を付加、つまり価値増殖するのであり、この運動が、価値を資本に転化する。

○「単純な商品流通」は、その過程の外の「消費・欲望充足が目的」だから、過程が終わると流通は閉じ完了する。これに反し、 $G-W-G'$ は最初と最終が同質の貨幣・交換価値であるということから、すでに運動は無限である。この貨幣を、消費支出や退蔵貨幣として流通から引き上げることは可能だが、それは資本であることをやめることになるから、貨幣循環の終結はおのずから新しい循環の発端となる。資本の「価値増殖」目的のためには、常に新たな「 $G-W-G'$ 過程内で運動することが必要」という意味で、「資本としての貨幣の流通」それ自体が自己目的である。したがって、資本の運動は無制限である。

○この運動の意識的な担い手である貨幣所有者が資本家となる。彼は、人身化し意思と意識を持った資本として機能し、その直接的目的は、「休みなき利得の運動」である。

○「資本としての貨幣」流通では、貨幣と商品は「媒介物」でしかなく、「価値」が常にこの流通の中に存在する「自動的な主体」に転化している。貨幣形態が一般的存在様式であるとはいえ、その形態が資本なのではなく、資本の実体は価値である。価値は、自分が価値であるから価値を付け加えるという、神秘的な性質を得る。金の卵を産む。(「資本の物神性」)

○「 $G-W-G'$ 」過程は、「商人資本」特有のこのように見えるが、「産業資本」もこの過程をとり、最初は貨幣であり、商品を買ひ、販売してより多くの貨幣に再転化する。売りと買いの間に生産を挟んでも、流過程は少しも変わらない。最後に「貨幣資本・利子付資本」は、商品媒介のない簡素化された「 $G-G'$ 」で表示される。こうして、「事実上」、「 $G-W-G'$ 」は、直接に流通部面に現れる「資本の一般定式」である。

(from Tak)